

風の便り (第88号)

発行日:平成19年4月

発行者:三浦 清一郎

◆「教育公害」の発生を助長する教育論の特性(2)◆

「単眼」の教育論—「Single Issue主義」

前回、「教育公害」の発生を助長する教育論に「単一分野教育論」とでも呼ぶべきものがあることを指摘した。教育や発達の一分野だけを取り上げてその分野の問題を解決できればあたかも教育のすべての問題に対処できるかのような幻想を振りまく教育論である。「食」や「気」の問題だけを取り上げてあたかもそれですべての健康問題が解決できるかのような幻想を振りまく健康論に似ている。両者に共通しているのは教育も健康も心・身・気に亘る複合問題であることを忘れているところである。例えば、「読み聞かせは子どもを救う」というのはタイトルからして「読み聞かせ」という部分が子どもという教育の全体を救えるかのように錯覚させる。「読み聞かせ」が「救える」のは子どものほんの一部の問題にすぎない。

その後、既存の参考書を読み進むに連れて「単一分野教育論」は物事を総合的・多面的に見ることの出来ない「単眼」の思想あるいは一事が万事を決めるかのように論じる「Single Issue主義単一事項主義」とでも呼ぶべきものである。それは「画一性」の解釈において然り、「負荷」の理解において然り、子どもの「主体性」や「気づき」の解釈において然りである。学校がカリキュラムを分けたように教育における分業は当然必要であるが、分業の前提には「全体」があり、「総合」があることもまた必然である。一面的、単眼的に教育を論じることの危険性がここにある。

● 1 ● 「画一的」は悪か！？—その意味と解釈

桐野夏生氏は著名な直木賞作家である。彼女は文芸春秋編「教育の論点」の中で学校の画一性について論じている。小学校の絵の展覧会に行ったら張り出されていた絵の構図も、色もすべて同じようなものであったという。先生が「人物を描きましょう」というと、必ず質問する子どもがいるのだそう。「先生、輪郭は黒で描くんですか、肌色ですか」と。先生が「肌色で」と答えると、皆一斉に肌色で描くのだと言う。また、体育でも『出来ないのはお宅だけです』と教師に言われるのを恐れて、母親

達は夕暮れ時の公園で子どもに鉄棒の逆上がりの特訓する。…「学校教育の『画一』は母親に補助を要求するのである」。…「子どもが『画一』を強要されるならば、母親もまた「画一的な母親」になることを強要される。親の養育態度に個々人の差があるのは当たり前なのに、気がつく大きな流れの中において絶対に逃げられないような仕組みになっていることが恐ろしい」。もちろん、桐野氏が挙げた事例は事実であろうし、指摘の意味するところはなるほど恐ろしい。筆者もその通りだと思う。しかし、

「画一性」の問題は人物画の輪郭をすべて「肌色」で描かせるという教師の指導だけに代表されるものではない。「画一性」の問題をある特定の教員や特定の学校の指導上の「馬鹿の一つ覚え」の事例だけで学校教育の全体ましてや教育全体を論じることは同じように危険である。

たとえば、筆者が関わっている「豊津寺子屋」が重視する「型」の教育は、「画一」指導の別名でもある。整列する時はこのように整列し、指導者にあいさつする時は最小限このようにあいさつしなさい、と教えている。掃除は手抜きをしないでみんなで最後までちゃんとやれ、と指導し、数少ない基本ルールには必ず従え、と教えている。例外は原則として認めない。これらは子どもが学ぶべき最小限の集団生活技術であり、社会性だからである。「型」の指導は「型」にはめるわけだから、「画一的」だと言われればまさしく「画一的」である。桐野氏が指摘

する「体力」や「耐性」についても、長崎県壱岐市の霞翠小学校が実践した「10分間マラソン」は、「(速く走らなくてもいいから)、『10分間』は止まらずに例外なく走り続けなさい」と指導してきた。最低限こまではがんばって耐えよ、という指導原則を課さない限り子どもの実力は向上しない。このような指導法も「画一的」と言われればその通り、と答えざるを得ない。

しかし、画一的指導から始めても、子どもの個性や創造性に着目すれば、最後まで「画一的」に指導を続ける訳ではない。世阿弥の指摘の通り、「型より入りて、型よりいでよ」である。基礎基本の「型」を踏んだ後は、本人の創意工夫で自在に「型」から踏み出す努力を促さねばならない。「型」にはめる」だけに留まれば危険だが、何の予備レーニングもなしに自由にやってみなさいというのはもっと危険である。教育の自殺と言ってもいい。

● 2 ● 「画一指導」のTPO

「画一性」を言い換えれば「型通り」とか「みんな同じように」という意味であろう。また、「均等」、「均質」、「一斉」、「統一」、「横並び」などにも近い。子どもの発達支援には、当然、彼等の興味・関心にしたがって、自由にさせなければならない場面と、子どもの欲求の如何に関わらず自由にさせてはならない場面とがある。上記の絵の指導にしても、デッサンの原則とか、色調の原理とか誰もが知って、誰もが守るべき基礎基本はあるであろう。絵画でも、スポーツでも、集団生活でも、ものごとの「基礎・基本」は全員に一斉に、例外なく教えるのは当然である。それを画一的と非難するとすれば、その思考法こそが画一的であると言わねばならない。個性や創造性をもものごとの基礎・基本の上に置いてはならない。したがって、教育の目標や発達の領域によって「画一的指導」が極めて有害になる場合と有益になる場合があるのだと考えざるを得ない。言うまでもないが、交通ルールや子どもの犯罪防止のルール等は「画一的」・「例外なし」に

守らせなければならない。桐野氏の指摘のように、分析に使われた特定の事例に当てはまって、正しくてもその事例だけをもって教育の全容を論じようとする単眼の指摘は危険である。政治でも、教育でも、健康問題でも同じであるが、「Single Issue(単一事項)」を「単眼」によって解釈した「部分分析」で子どもの発達の全体は見えないのである。

教育のような総合的営みが教育分業の袋小路に迷い込んで専門・特定分野の視点からのみ論じられることも教育公害を助長している。少年スポーツにしても、その他の習い事にしても熱狂して見境なくのめり込んで行けば必ずどこかで発達のバランスを損なう。「一道に通ずるものは二道、三道に通ず」は応用力の真実ではあるが、極端に走ればどの道も見えなくなる。発達は総合的、従って教育は複合的で、子育てには「さじかげん」が不可欠である。

● 3 ● 「負荷」はマイナスか！？—「負荷の教育論」

「子ども中心主義」が強調されすぎると、当面問題となっている当人にとみとられがちになる。「子ども中心主義」が「当人中心主義」になるのはそのためである。目の前のことに囚われれば、教育の視野狭窄が起こる。結果的に、子どもの発達や教育を考える上で他者の視点や社会の視点が欠落する。したがって、子どもの欲求と「わがまま・勝手」を線引きする基準が希薄・曖昧になる。「認めるべき欲求」と「認めてはならない欲求」の区別が曖昧になる。それゆえ、子どもの「主体性」と「欲求」との混同が起こる。子ども中心主義にとって「主体性」概念は常に曖昧であり、その条件と構成要因を説明していない。結果的に、「主体性」は、子どもの「興味・関心」や「欲求」と等値され、最終的に「抑制方法」が語られない以上、「やりたいほうだい」とどこが違うのか、不明である。

興味・関心や欲求と主体性の等値・混同が起これば、子どもの「やりたいこと」を尊重することも、「やりたくないこと」を尊重することも子ども中心主義の発想に適っている。この時、注意すべきは、子どもの「やりたいこと」に、子どもへの強制や子どもへの負荷は発生しない。反対に子どもの「やりたくないこと」を尊重すれば、ここでも子どもへの負荷は発生しない。それゆえ、子どものことは「子どもに聞け」という教育論・指導論は、教育における「負荷」の意味が分かっていないのである。

伝統的な子育てや教育の格言を検証してみると、それらはあたかも「負荷の教育論」と呼んでいい。「かわいい子には旅の」旅も、「他人のメシを食わせよ」の「他人のメシ」も、「辛さに耐えて丈夫に育てよ」の「辛さ」も、「若いときの苦勞は買ってでも」の「苦勞」も子どもに「困難」を与えよ、と強調している。困難こそ「負荷」の別名であり、教育やトレーニングの基本条件である。特に、注意すべきは、成長期の困難は人生のワクチンであり、予防注射である。

病気予防のワクチンが実際の病原菌から培養されるように、人生の負荷も実際の困難に模して教育に応用される。負荷をかけることが本人の努力や挑戦を促し、心身の抵抗力を向上させるからである。体力も耐性も負荷

をかけることなく向上はしない。それ故にワクチンの使用には「適量」の概念こそが最も重要である。予防注射のワクチンも与える量が度を越せば、ホンモノの病気を発生させてしまうように、負荷も度を越せば子どもは耐えられない。「さじかげん」や「適量」が大切なのはそのためである。負荷がすべてマイナスなのではない。負荷の与え過ぎが危険なのであり、負荷を全く与えないことも同じように危険なのである。

ワクチンが病原菌に対する抗体を形成して、免疫力の向上を意図するように、教育における人生の予防注射も困難に対する抵抗力の向上を目指している。体力の形成も、耐性の向上も「感覚体」としての人間に対する適量の負荷に対する反応の結果であり、抵抗力の向上である。それゆえ、適量のがんばりは教育の必要条件であり、適量のストレスも発達の不可欠の要因である。過保護の最大の危険は子どもが必要とする負荷を周りが先回りして取り除いてしまうことである。

我々は「無菌室」で暮らしている訳ではない。様々な病原菌やストレスの中で暮らしている。だからこそ「抵抗力」が重要なのである。人生もまた同じである。子どもにも、大人にもまったく困難のない「ストレス・フリー」の生活は存在しない。それゆえ、病気予防に防衛体力や免疫システムが大切であるように、子どもの人生にも困難に対する抵抗力＝心身の耐性（行動耐性や欲求不満耐性）が不可欠であることは言うまでもない。

子ども中心主義は子どもの「やりたいこと」を尊重し、「やりたくないこと」もまた尊重する。子どもの欲求に囚われれば、結果的に、子どもへの「負荷」を最小限にする傾向が強い。彼らは面前の子どもの反応に目がくらんで体力や耐性等心身発達のメカニズムや精神と肉体の連続性を考慮していない。なぜ、人生にも予防注射が必要であることを理解しないのか？保護に傾く「子宝の風土」の副作用を知っていた先人の知恵は「負荷の教育論」を語っているのである。

● 4 ● 「体験」信仰—教えることと体験することのバランスを崩すな！

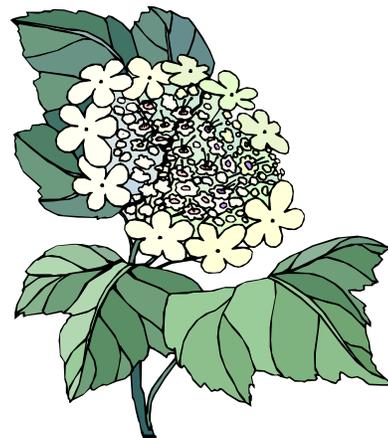
人間の学習に体得にとって「体験」が重要であることは論をまたない。筆者もまた「体験論者」であることにおいて人後に落ちない。「やったことのないことは分からない」からである。しかし、である。「体験」の盲信もまた単眼の思想である。時に、体験信仰は子どもの主体性論に発する。その信仰は”子どもが自ら気づくまで待つべきである”という論に代表される。「子どもの気づき」、「子どもの発想」、「子どもの表現の豊かさ」、「子どもの自発性」等のスローガンも似たような雰囲気をもっている。子ども中心主義は、時に、教育の自由主義であり、放任主義である。従って、「型」の指導とは真っ向から対立する。

確かに人間の歴史や文化や学問は延々と続いた人類の試行錯誤によって検証された知識や知恵の蓄積である。試行錯誤の鍵は「体験」である。蓄積の目的は未来に繰り返されるであろう無駄な試行錯誤や徒労の探求を回避するためである。また、体験を通じた試行錯誤は人間が学ぶ重要な仕組みの一つであるが、すべてを試行錯誤によって学ぼうとすれば人生にいくら時間があっても足りはしない。無駄な試行錯誤を避けるためにこそ学問は発達し、理論が蓄積・体系化されて来たのである。教育の自由主義や放任主義は上記の「無駄」を放置することになるのである。多くの修行が「型」から入るのは、体験の蓄積や理論に裏付けられた方法から入ることである。

実践によって検証されていない理論は役に立たないばかりか、時には有害であるが、逆に理論を無視して這い回るだけの「体験主義」も同じように時間とエネルギーの浪費を伴う無駄で有害な教育実践である。体験がようやく重視される時代が来たが、座学重視の反動として教えるべきことを教えずに子どもに闇雲に体験を強いることは多くの場合、無駄と徒労を強いることになるのである。自らの体験によって「体得」することは極めて大切であるが、その無駄と限界を知ることもまた大切である。

理論の説明を受ければ瞬時に分かることも、知らなければ延々と試行錯誤が続くのである。優れた先生につくこと、優れた「型」を選ぶこと、理論をきちんと学ぶことの意味はそこにある。体験を繰り返すだけでは、想定された時間内に子どもが気づく時もあるが、気づかないことも多い。集団生活のルールを教えずに集団生活をさせても子どもが共同生活の原則を自得できるとは限らない。放任主義のキャンププログラムや根性主義の練習方法の「体験信仰」の問題点はそこにある。体験は重要であるが、決して万能ではない。体験重視の発想が体験信仰に傾けばこれもまた単眼の思想である。それゆえ、子どもの主体性、子どもの可能性に幻惑されてはならない。教育も子育ても鍵はバランスである。理論と体験のバランスもどちらかに傾けば単眼の思想であることを免れない。

「主体性」も「自主性」も、状況の理解力、なすべきことの判断力、なすべきことをなすべき時に実行する能力、なすべきことをなそうとする意志力の4つがなければ発現しない。子どもの体験だけでそのような力が向上するはずはない。幼少年期の能力が自然発生的に形成されると仮定することがそもそも「児童中心主義」の子ども観の甘さである。



”年寄り死んでください国のため”

—The Active Senior:これからの人生—熟年の危機と「安楽余生」論の落とし穴—

(学文社、2007.4.15発行、¥1,575;税込み)

表題の言い回しにはどきっとするでしょう。これは、医療費でも、介護費でもますます高齢者の負担を増やし続けている国の高齢者政策を評した川柳だそうです。大分県のある町の講演会で大会の実行委員長さんが筆者の提案に対する感想とご挨拶の中でご披露されたものでした。筆者は、「親孝行したくないのに親は生き」をお返しに紹介しました。

この話を地方雑誌「嘉麻の里」編集長の大庭星樹さんにお話したら、彼が笑って、自作の川柳を紹介してくれました。下関市の高名なお寺を訪ねた吟行会るとき、「延命水」なる名物があってみなさん競い合ってお飲みになったそうです。2007年問題でメディアが騒がしい昨今ですから、見ていた大庭さんには、俳句の代わりに川柳が出来たそうです。いわく、「延命水、飲んで家族を困らせる」。現行の高齢者施策は大いに間違っています。高齢社会は今後ますます混沌の度を増すことでしょう。

つい最近、表記副題の通り、筆者の2007年問題への提言を1冊にまとめて学文社から出版しました。現行政策への批判の論理と語勢がいささか足りなかったかな、という反省はありますが趣旨は理解して頂けるであろうと満足しています。「ですます」調で書いたことも良かったのではと思っています。昨日、高齢者大学の講義にもって行ってみたらすべて売り切れました。社会と切れたところで生涯学習だけやってもダメだ、という指摘が刺激的だったのでしょうか？それとも、「ですます」調の文体が柔らかいということだったのでしょうか？今後は論文調は控えようと思った次第でした。

この東京一極集中の時代に、地方の引退研究者の著作をよくも世に問うてくださったと学文社の三原多津夫氏には感謝の気持ちでいっぱいです。一層の精進を約束し、来年は「教育公害がやってくる」を書かせていただくことをお願いしたところです。

ところで現行の高齢者問題については、関係者の診断も処方も極めて甘く、現行行政の分業と縄張りにとらわれているので、複合的な問題を部分的にしか見ていません。健康体操やメボリック・シンδροーム対策だけで年寄りの健康を守れるはずはないではないですか！？医療費も、介護費も早晚破綻に直面し、増税か高負担の時代が来るでしょう。施策は直接間接に、多くの年寄りに「早く死んでくれ」と言わんばかりですから、表題の川柳もうなずけるというものです。

新著の提案の視点は基本的に以下の3点に集約できます。

- 1 年寄りの増加が問題の根源ではない、何もしない年寄りの増加が原因なのである。
- 2 元気だから活動するのではない、活動を続けるからお元気なのである。
- 3 熟年活力の処方は「読み、書き、体操、ボランティア」の総合、なかんずく、社会貢献の継続が熟年を支える。

向老期の人生地図を書きたいと渾身の力を込めました。生涯学習施策が何をすべきか、高齢者福祉はなぜ生涯学習と統合されなければならないのか、ご興味のある方はどうぞご一読をお願いします。



出口のない癒し

－ 「子育てサロン」の行方 －



⇔ 1 ⇔ 出口のない癒し

子育て相談や子育てグループのネットワーク化のプログラムが盛んである。筆者のところに数種類の報告書をいただいている。気になるのは多くの報告書が「出口のない癒し」や「処方のない診断」に終始していることである。保護者の「交流」も「情報の交換」も「ほっとすること」も大事なことであるが、仮にそれらがうまく進んだとしても、子育ての実質的作業は、変わらずに残る。子育てサロンで仲間を見つけても、子育ての義務は変わらない。“苦しいのは自分だけではないのだ”とほっとしても、養育行動の実質的負担は何ら変わらないのである。子育てサロンに自らの居場所を見つけても、子育ての緊張や負担感から解放されて一時的に救われたとしても、「一人前」の育成の任務も義務もまだまだ終わらない。「癒し」は大切であるが、それは具体的作業の出発点にすぎない。状況の診断も重要であるが、処方の実践が伴わなければ、状況の改善はできない。公的施設が時間と金をかけて実施する家庭教育や子育て支援に対する教育

の「カウンセリング」的アプローチだけでは問題は解決しないのである。

真に重要なのは問題解決の実践であり、実践の中身を決定する「原理」と「方法」である。サロンで自分と共通項のある仲間と出会って参加者は楽しかったろうが、その後の子育て実践に何か変化は生じるのか？それとも気を取り直してこれまでの苦労を再び繰り返すのか？問われるのはそこである。

現代教育は惨めな失敗である。養育の失敗についても、いじめの悲劇についても多くの癒しが語られ、多くの診断が発表されるが、効果的な処方の実践は見あたらない。家庭教育も大問題だからこそ、家庭教育支援が公的に行なわれるのであろう。真の課題は現行の教育プログラムや子育て実践を変革することである。何よりも当面の具体的課題は3代続いた「過保護」を止めなければならない。

⇔ 2 ⇔ 「宴」の後

みんなが集まればエネルギーが生まれる。ネットワークが出来れば新しい交流も楽しいことだろう。楽しい祭りや人々の「元気」を生み出す。それゆえ、出会いは大事だが、公的に支援する以上は予算も時間もかかる。それゆえ、行政は支援事業の優先順位を決めなければならない。宴を作ることも、宴への参加を促すことも、そこから「元気」を生み出すことも少子化の防止や子育て支援の決定的な決め手にはならない。このような集まりに参加できない、あるいは参加しない人々への支援にもならない。「宴」の後に子育て実践がそのまま残ることも上記の通りである。

鍵はシステムとしての保育と教育の統合である。したがって、幼保の一元化と学童保育と教育における子育て

支援のドッキングである。家族が負っている養育の負担を減らし、子どもの発達上の保護者の心配を緩和できなければつぎの子どもを育ててみようという気にはならないであろう。

少子化防止の答えは「子育てサロン」ではない。「養育の社会化」である。子育て支援は女性支援であり、なかんずく働く女性の養育負担の軽減である。同様に、子育て支援は現状の子育ての諸問題を教育的に補完する発達支援でなければならない。国の政治家が「放課後子どもプラン」の機能と意義に気づいたにもかかわらず、地方の政治家や行政はその発想をほとんど実行に移してはいない。少子化防止、子育て支援に関する限り、地方の分析力も実行力も極めて弱く、国の方針にも従わな

い。地方分権論の幻想に落胆したのは筆者だけではないであろう。少子化は政治課題である。地方政治の質が

問われ、行政の自己調整能力が問われ、行政に対する政治家の指導力が問われている。

⇔ 3 ⇔ カウンセリング的アプローチの限界

当今のカウンセリングはアメリカの心理学者ロジャースの流れを汲んで、「積極的傾聴(Active Listening)」を基本とする。積極的傾聴はクライアントの現状の肯定と受容を前提とする。それゆえ、「癒し」はクライアントの現状を受容し、否定しないことから起こる。人々の現状を”これでいいんだ”と肯定することによって辛さや欲求不満を解消するのである。しかし、子育ての努力は数年～数十年に亘る連続である。現状を肯定するだけで決して問題は解決しない。家族の負担も変わらない。”みんな

同じように苦労しているのだ”と心情を分かち合う同士を発見しても、仲良しクラブの交流の範囲を地域を越え、郡域を越え、時に県域を越えて広域化したとしても、それで子育ての苦労や負担が解決する訳ではない。

学校教育がカウンセリング的アプローチに影響されて、不登校や引きこもりや非行やいじめなどに対処しようとして来たが、結果はどうか？成果は上がっているのか？状況は改善されていないではないか！社会教育よ、おまえもか！？である。



MESSAGE TO AND FROM

お便り有難うございました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。皆様の意に添わないところがありましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

★ 山口県下関市 田中隆子 様

エネルギーに脱帽しています。学生を巻き込み、彼らに社会的活動の場を提供しているだけでも驚きですが、社会福祉協議会を説得し、子育て支援の協賛を得、熟年支援の意味を理解させ、しかも今年中に両方とも事業化するという手際はあなたの使命感とエネルギーの賜物でしょう。当方も全力でご協力申し上げます。

★ 広島県府中町 中村由利江 様

現場でご活躍のこと喜んでおります。創作紙芝居の完成を楽しみにしています。山口のセミナーパークでおやりになったように、中・四国九州地区の第26回大会のロビーでお披露目はいかがでしょうか？

★ 宮崎県延岡市 太田素一 様

懐かしいお便りでした。再会を心待ちにしております。子育て支援がんばりましょう。現状は、子育て支援は女性支

援から切り離され、子どもを「一人前」に導く適切な発達支援からも遠いところにあります。出来れば第26回大会でお会えますように。

★ 東京都 五十嵐秀介 様

北海道でお目にかかったとは知りませんでした。「引越しのサカイ」について書いた文章まで覚えていただきまして感謝しております。東京での再会が楽しみです。自分の提案がご参加のみなさんにout of placeでないことを祈ります。人員が減らされ、予算が減らされ、社会教育に対する政治家の評価は低く、崖っぷちまできているのに、最近、社会に役立つべき論理が通じない状況に2回連続で遭遇しました。かつて若者達が社会の変革を叫び、「自己否定」という言葉がはやった時代がありましたが、今こそ行政の過去の自己否定が必要なのだと思っています。

『編集事務局連絡先』 三浦清一郎 住所 〒811-4177 宗像市桜美台 29-2

TEL/FAX 0940-33-5416 E-mail sdmiura@fj8.so-net.ne.jp

『風の便りの購読について』 購読料は無料です。ただし、郵送料の御負担をお願いしております。『編集事務局連絡先』まで 2007年5月号～12月号をご希望の方:80円×8ヶ月(残月分)=640円をご郵送下さい。『オンライン「風の便り」』 <http://www.anotherway.jp/tayori/>

アメリカに住んでいる娘が復活祭の休みに帰国して思わぬ一週間が過ぎた。就職もし、結婚もし、一人前になった娘と過ごす時間には、現在と過去が交錯する。食卓の会話も、お茶の会話もそうなる。

これまでではひたすら前を向いて走り続けて来たので、思い出や過去の記憶に生きた時間ほとんど全く経験したことはなかったが、遠くに住んでいる子どもの登場で、過去のアルバムをめくるような思わぬ回顧録体験をすることになった。

「過去にこだわるな！」というのが高齢者の日常に対する専門家の助言であるが、成長した子どもが目の前に立つと、なかなかそうも行かないことを実感している。筆者に「現在」が存在しない訳ではないが、若い頃のように日々時間に追われて、何事かに向かって挑戦し、己の「現在」に不満で、「不断の戦い」の中にいるわけではない。

むしろ、これまた、参考書の言うように、「多くを望まず」、「足るを知る」を目標として生きようとしている。若い者と対峙した時、そうした姿勢は我ながらどうしても消極的だな、と思わざるを得ない。職業的な向上心や子育てに懸命であった頃の緊張と充実にはほど遠い。「現在」の重要性が相対的に減少すれば、結果的に、年寄りも過去の記憶の中に生きようになるのではないか！？なにかんづく現役世代が多忙な年度末はやりきれない。(キリスト教国の復活祭の休暇は日本の年度末と重なる。)年度替わりの春休みは筆者のような「自由業」に出番はない。卒業式も入学式も、送別会も歓迎会もない。英語ボランティアのクラスも受講生の大部分が「連続」しているので、年度が替わってもほぼ同じメンバーが出席する。どこかで「卒業」のような人為的切断をしない限り、別れの辛さも出会いの新鮮さもない。日常の変化の刺激こそが人間を緊張させるのであろう。娘はふたたび遠いアメリカへ旅立って行った。今生の別れになるかもしれないが、「現在」を取り戻すためにはそれでいいのであろう。

筆者にとってもようやく明日から新年度初めての講演が始まる。初めての人々に出会う。肩書きがない以上、しくじれば2度と「出番」はない。背広のちりを払い、レジュメを見直し、発声の練習を始める。夜半に目覚めてこの文章も書いた。ようやく己の「戦場」に戻って来たのである。自分の「戦場」を大事にしなければ、あっという間に「過去に生きる人」になってしまうだろう。医療費の高騰も、介護費の大赤

字も老人の肉体の老衰にだけ原因があるのではない。「世の無用人」となって、「過去に生きるしかすべがなくなる」ことに原因があるのではないか？過去に生きようになれば気力も活力もチャレンジ・スピリットも必要ではなくなる。世の中に具体的に還元・貢献することのない「生涯学習」や「生涯スポーツ」で老後の生き甲斐や活力が支えられるとはどうしても思えない。そこには自分が試される「戦場」がない。現行の公的な「社会教育」行政の財源と人員を減らし続けている政治家の「直感」は決して間違っていない。少子高齢化にとって現行の公的「社会教育」はほとんどあるいは全く役に立っていないのである。

仕組みとしての「定年」はやむを得ないが、定年後のアフターケアを掲げた高齢者福祉も生涯学習施策も大いに間違っていたのではないか！？定年後5年程度は賃金と労働時間を工夫した週2～3日労働、6～10年後は週3回程度の費用弁償を伴う社会貢献活動、その後は肉体の健康次第だが、可能な限り年寄りも社会を支え続けるという具合に、定年者と社会との関係を漸減させてゆく工夫を施さなければ、熟年は一気に老け込み、社会保障の負担は一気に増大するのである。職業の「労苦」の果てに「安楽」を欲することは分からぬでもないが、「安楽な余生」は決して「安楽」だけをもたらすものではない。身近に見るごとく「安」は「安穩」・「安逸」に通じて多くの小人は不善を為し、「楽」は「墮落」に通じてパンとサーカスだけを追い求める。老いた「居候」と「厄介者」の増加は、「安楽」が総じて高齢者の心身の活力の「墮落」に通じていることを象徴していないか！？「ニート」は職業や学業を通して社会への参画を目指さない人々を意味し、通常は若者のことだと思いついでいるが、老いた「ニート」もまた家族や社会の負担は大きいのである。己の「現在」を失えば、現世の存在資格が軽くなり、人生の白秋や玄冬の季節に安楽を追い求める老いたキリギリスはこの世のアリ達から疎まれる。高齢社会が来て、年寄りを尊敬する文化は死滅する。若者の高負担が続き、高齢者が過去の人となり、安楽の余生に甘んじて、現世への具体的貢献を忘れれば、若者が年寄りを憎み始める日が来るであろうことを恐れる。若者に限らず、人は他者のための一方的な負担には耐えられない。これもまた人生の不思議である。

中・四国・九州地区生涯学習実践研究交流会
— 26回大会ご案内 —

新緑のささぐり;風薫る県立社会教育総合センターでお会いしましょう！！

5/18(金)夜7:00～前夜祭

5/19(土)午前・午後:事例発表/「特別報告」、夜「懇親会」

5/20(日)午前:インタビュー・ダイアログ2テーマ

第26回大会の準備が整いました。各県の実行委員のみなさんから実践発表・28事例のご推薦をいただきました。司会者のみなさんに付きましても実行委員のお力添えで男女半々:男女共同参画の理念に則って選出して頂きました。

今年はNPOや学校が注目を集め、子育て支援の実践発表が多く集まりました。日曜日の「特別企画」は2本だてのインタビュー・ダイアログです。一つははじめの隠蔽や学力の低下、教師の挫折や学校運営の閉鎖性で教育再生会議の”まな板”に乗っている現代の学校を取り上げます。もう一つはNPOの仕事を検証し、あらゆる分野に進出し始めたNPO関係の皆様のチャレンジ・スピリットとその具体的な創意工夫の成果を伺います。筆者が担当する土曜日の「特別報告」は「少子高齢化対策」と「教育公害」に注目しました。筆者の分析が「間違っている」ことが一番いいのですが、残念ながら少なくとも、予想の半分は現実のものとなるでしょう。

- * 当日、会場では「イベント情報」、「まちづくりの企画」、「ふるさと自慢」などのポスター、チラシ等出品できます。受付にお申し出ください。ただし、展示品は返却できませんので予めご了承ください。
- * 問い合わせ・申し込みは出来るだけお早めに！！大会前に参加者名簿を作成できるよう事務局ががんばっております。
- * 申込先は福岡県立社会教育総合センター(研修・情報室—第26回大会事務局)です。

TEL:092-947-3511 E-mail:mail@fsg.pref.fukuoka.jp

- * ふくおか生涯学習ネットワーク(<http://www.fsg.pref.fukuoka.jp>)からも申し込み様式をダウンロードできます。